

戦争を知らない世代へ 40 福岡編

恐怖の焼夷弾

福岡空襲の証言集

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ④〇 福岡編



創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ④福岡編

恐怖の焼夷弾——福岡空襲の証言集

昭和53年 6 月18日 初版第 1 刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話03 (294) 8731 (代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

1978 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します

0036—7040—4438

発刊の辞

終戦の年に生まれた子どもたちも、今年で早くも三十三歳を迎える。現在、社会の第一線で活躍している青年は、文字通り「戦争を知らない世代」である。年とともに反戦意識の風化が叫ばれ、平和運動の在り方が論議的となってきたが、そうしたなかで、この『戦争を知らない世代へ④福岡編』が、反戦平和の砦を築くひとつの礎石となることを確信してやまない。

福岡県下は、中心都市・福岡、鉄の都・八幡とその周辺都市（現北九州市）そして、軍需工場のあった大牟田市と久留米市が、昭和十九年から二十年にかけてたび重なる空襲を受けたのである。出版委員会のメンバーのひとりが次ぎのように語っていた。庶民一人ひとりのそれは、みずからの小さな生活圏だけでの体験であり、一部分かも知れないが、それらがこうして一冊の本としてまとまるとき、空襲の全体像を鳥瞰すると同時に、戦争そのものを告発する痛恨の一書となる、というのである。私もまったく同感である。

人類の歴史上、戦争の犠牲者は常に名もない民衆であった。だが、戦争をのろい、戦争反対を

叫んでいたはずの民衆が、いつのまにか再び戦争に駆り出されてきたのも事実である。そしてそこに、常に為政者のエゴと傲慢と愚かさがあったことを忘れてはなるまい。

今、愚かにして賢なる民衆は愚かな指導者をコントロールする知恵と力を持ち始めている。この一書がその一助となればさいわいである。

ともかく、戦争を知らない戦後世代の人たちが、悲惨な戦争の実態を知り、反戦平和の勇氣ある「戦士」になっていただきたいと願いつつ一読をおすすめしたい。

最後に、本書の編さんにたずさわったメンバーの労に心から感謝するものである。

昭和五十三年五月九日

創価学会青年部

福岡県青年部長 百田光男

目次

発刊の辞

第一章 福岡編

恐怖と怒りと虚脱……………	波多江五兵衛
B 29・三百機の空襲……………	尾本年男
「十五銀行」の地下室から生還……………	栗田口コウ
大濠公園に逃れて……………	井ノ口満子
炎の中を逃げ惑う……………	大村清太郎
母と姉を助け出し……………	河村利子
決死の写真撮影……………	野田篤司
足に焼夷弾の直撃……………	樋口秀美
ドブ川に身を隠し……………	鮎川エイ
父の位牌と共に死を覚悟……………	国崎紀
那珂川に飛び込んで……………	大塚モト
「日本も今度はダメばい」……………	松岡惣太郎

第二章 北九州編

床下の防空壕で六人が死亡……………	中村博好
友を捜して焼け跡を……………	篠原静子
傷の痛みとともに蘇る……………	匿名
たった一人のわが家に直撃……………	塩川朝栄
防空壕で睡魔に襲われて……………	古賀恭誠
炎に逃げ場を失った一家……………	渡辺セツ子
爆発実験で百人が死傷……………	河野稔秋
愛娘を抱きしめて……………	吉田みよ
何らなすすべもなく……………	福田富美子
工場内に足どめされて……………	平元音松
病弱な母と弟妹を抱えて……………	永田道子
母の胸に顔をうずめて……………	田中チドリ
暗い空から焼夷弾が……………	知念シゲ子
袴をモンベに替えて……………	柳丸トヨ子
町内会長としての責任感で……………	長崎八郎
10名の下級生を引率して……………	成清正敏
胸がつまった大量火葬……………	岸川みつえ
船の墓場・関門海峡……………	島忠美

第三章 大牟田・久留米編

恐怖の機銃掃射……

下川繁夫

有明海岸へ逃げろ！……

小崎清之助

一瞬に六人の子どもが爆死……

塩塚小一

焼け出されたうえに赤痢が……

田代ツヤ

死んだ子どもの分まで生きて……

鶴田カヨ

学徒動員のさなかに……

坂井幸子

救助活動中に妻子四人が灰に……

中津福三郎

突然、体が宙に浮き上がって……

小山ナツ子

あとがき

第一章 福岡編

恐怖と怒りと虚脱



波多江 五兵衛

(当時39歳 第九警防
分団本部副部長)

昭和二十年六月十九日、博多の街は米軍のB29による空襲で焼土と瓦礫になった。そのときの地獄図は二度と思い出したくない。

それを記録のためとはいえ、古い日記を再び開くことは、何としても気が重い。それは怒りと悲しみの文字だからである。

当時、私は現在の綱場町に店をかまえていた。天正時代から四百年も続く漆器商人であった。戦況が緊迫してきたころ、民間防衛組織だった警防団も、若い人が次ぎつぎに出征して、残る団員も半数に減っていた。これで空襲を受けた場合、果たして住民の皆さんの避難を誘導したり、出火を消したりする活動が出来るのだろうかと不安だった。

私たちはまだ空襲の実際を知らない。わずかに新聞の記事と写真でみる被災地の姿は、ただの大火の焼け跡と同じ印象でしかない。

それにさいわいに生き残った人がいるとして、その人たちの食糧はどうなるのだろうか、おそ

らく爆弾のために水道の水も止まっているだろうし、電気もないだろう。いやそれよりも街が一度に火の手をあげた場合、逃げまどう人びとのパニックを、少数の警防団の者で押さえきれものだろうか。

そんな災害時のために考えることは山ほどあったが、どれひとつとして確かな答えは出てこない。それでも毎日のように警戒警報のサイレンは鳴る。

六月十九日午後七時、警戒警報のサイレンが鳴った。毎日のように聞き馴れてしまったサイレンなので、奈良屋小学校地下室にあった福岡市警防団第九分団本部に集まった団員たちは、誰もが、またか、ヤレヤレといった顔だった。みんなに緊迫感などはなく、楽な気持ちで談笑していた。いつもだと、警戒警報が出ても、十数分後には解除の知らせがあるのに、その日はいつまで待っても解除にならない。

「今日は長いなあ、司令部は忘れとるとじゃなかろうか」

などと、笑いながら話していた。

午後十時ごろ、突如空襲警報が出た。おかしい、変だぞ、と目を見合わしているうちに、ラジオが「敵機来襲」と叫んだ。ドキンと心臓が鳴った。

かねての手はず通り、団員たちは受け持ちの場所へ散っていった。本部に残ったのは分団長と

私たち本部員数名だけである。

私は急いで校舎の屋上に上がった。

遠くから爆音は聞こえてくるが、暗い空には機影は全く見えない。プロペラ音からすると、相当の機数であることはわかる。

私はその数日前に、所用のため長崎県小長井の海岸にいた。そこで偶然にも対岸の大牟田市の空襲を見ている。それは焼夷弾が玉すだれのように、大きな幅で火の玉の糸をひいたように落ちた情景だった。焼夷弾攻撃とは文字通り火の雨の落下だった。

爆音は福岡市の南方、油山あたりから聞こえる。やがて福岡城（当時、歩兵二十四連隊）の上で最初の焼夷弾が落ちた。焼夷弾は飛行機から落ちてすぐ火の玉となるらしく、仕掛け花火の滝のようになつて落下した。

この火の雨は列をひいて西公園の山の上まで続いた。敵機は博多湾の上へ出て、そのまま転進していった。

「馬鹿野郎、大濠公園と西公園にドカドカ落としやがる」

松や桜の木を焼いたといつて、どうということはない。私は本当の高見の見物という気でいた。しかしB 29は間もなく第二波、第三波と編隊で息つくまもなく飛んできた。それらは、かねて聞いていたように、一度は博多湾上に出てから、福岡市中心部に大きな輪を描いて焼夷弾を落と

し始めた。

都市攻撃は、まず周辺に円を描いて焼夷弾で火災をおこし、その円が二重、三重に火災を大きくして人びとの避難道を断ち、それから円の中を縦と横に焼き払っていくといわれる。

敵機は博多湾上に出て、立花山（香椎）、名島方面から博多の街の上で円を描き始めた。まさに聞かされていた通りの焼夷弾攻撃である。そのころになって立花山附近から探照灯が空へ向けられ、飛んでいるB 29をはっきり捕えた。やがて高射砲が鳴り始めた。

しかし高射砲弾はB 29の下で炸裂して、パッと白い煙りを出すだけで、一発も命中しない。B 29の姿は夜空に手がとどきそうに大きく見えているのに、なぜ弾が当たらないのだ、と私は地団駄を踏んだ。

そのうちに焼夷弾は博多の街に縦横に落ち始めた。駄目だ、みんな焼け死ぬと私は屋上から降りた。

地下の本部には分団長の奥村利助さんと団員ひとりがいるだけである。

消防班の人が二、三人飛び込んできた。続いて警報班の澄川勇君ら数人も帰ってきた。

「とても消火しきれない。このうえは何よりも人を避難させることに全力をあげよう」

そのとき、学校の雨天体操場へ焼夷弾が落ちたぞ、と誰かが叫ぶ声がした。

学校を焼くな、と三、四人が火消し用の縄等とバケツをつかんで走り出した。私も駆けつけた。

焼夷弾は俗にモロトフのパン籠といわれるもので、飛行機から落ちるときは、大きくたばねてあるが、途中でバラバラに分かれ、家屋へ落ちたときは銅貨大の小さな、ベタベタしたビッチのようなものになって、壁といわず、軒も、窓も、ちょうど自動車で泥水をはねられたような恰好で、ビチャッとくっつき、それがローソクの火のようにメラメラと燃えていく。

この焼夷弾は水でなく、繩箒でハタキ落とせと指導されていたので、私たちも住民の皆さんにそう教えていたのだが、実際にそのように繩箒でバタバタと叩いたり、ゴシゴシとこすってみたが、この燃えるビッチはビクともしない。板や壁にくっついたまませせら笑うかのように燃えている。

この小面憎い火が、雨天体操場だけでも百数十か所もメラメラと燃えていては、数人で消すなど、もってのほかであった。そのうち天井近くの高い所で燃えていたのが、とうとう天井に火をつけた。もうこうなっては手のつけようがない。私たちはこの消火を捨てた。

本部へ引き揚げた私たちは、街が火の海になっていることは百も承知のうえで、すこしでも多くの人を避難させるために、街へ飛び出すことにした。

そのころは敵機もいなくなつて、焼夷弾の直撃の危険こそなくなっていたが、街はどこも家の焼ける焰とバリバリと焼け倒れる音が、ひっきりなしに聞こえた。

私は自分の住居のある綱場町方面へ走った。さいわいこのあたりはまだ火事になっていなかった。

た。町の入口あたりから、

「防空壕に入っている人は、いま直ぐ出て避難してください」

声を限りに叫んで回った。でも誰も答える者はいなかった。

私は自分の家へ飛び込んだ、わが家の防空壕は店の下の深い地下室である。ここにはたしかに妻と小学生の長男がいる筈である。しかしそこには誰もいなかった。たぶん両親のいる東公園へ避難したのだろうと思った。

私はそのまま裏座敷へ行つて、救急箱と、その時は無意識だったが日本刀を一本持ち出した。フトみると裏の倉庫が燃え出している。長居は無用と表へ出て学校の分団本部へ駆け出した。

網場町から西町の四つ角へ来たとき、西町側から走ってくる数人の人に会った。

「学校へ来てくださーい」

と言ったが、皆さん動転していて、私の声が聞こえていないようであった。

「私について来てー」

と走り出すと数人だけがついてきてくれた。奈良屋町まできると山崎さんの家と隣りの畳屋の二階が、物凄い焰をあげて焼けている。瞬時立ち止まったが思い切つて走った。その十数秒後、二軒の家がドサッと大きな音と火焰を上げて道へ倒れた。振り返って息の止まる思いだった。私のあとについて来た人も無事だった。それにしても西町角で私と一緒に来なかった数人の人は無